審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、Hayes らの心理学的モデルに基づき、書かれた文章を対象として分析するテキストベースの視点と書く行為そのものを分析するプロセスベースの視点から、聴覚障害児の文章産出における特徴を明らかにすることを目的としている。幼少期から音声入力が制限される聴覚障害児は言語発達の遅れや課題が生じやすく、その困難は児童期以降の文章の読み書きに顕在化する。聴覚障害児の読み書きについては、読みの特性や困難に焦点をあてた研究に対し、書かれた文章の特徴や書くことのプロセスに着目した心理学的研究が非常に限られており、特別支援学校では子どもの書いた文章の評価や書くことの支援方法の確立が強く求められている。本研究は特別支援学校の教員が重視する文章の評価観点について大規模な調査と定量的分析を通じて検証した点、それらの観点が実際の文章評価に有効である点、意見文、説得文、説明文など、異なる目的で産出された文章の評価と文章を構成する言語要素との関連について明らかにした点、文章構成における聴覚障害児に特有の思考プロセスや書き進めるプロセスを実験的手法によって明らかにした点など、従来の研究にはない意義と独創性が認められる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

文章の評価に関する心理学的研究においては、客観的方法として印象評定法が広く使用されている。本研究では印象評定法を用いた文章評価に関する国内外の先行研究を踏まえ、それらの知見を集約し、多様な観点から構成された評価項目を設定して評価の妥当性と信頼性を検証している。また文章における言語要素の使用に関する分析においては、最新の計量言語学やコーパス言語学で使用されている統計的テキストマイニングの手法を用いている。さらに文章産出プロセスの検討においては、画像データをもとに処理に要する時間を指標とした厳密な定量的分析を行うなど、実験心理学の手法に基づいた検討を行っている。聴覚障害児を対象とした研究では、聞こえの障害に伴って生じるコミュニケーションや教示理解の難しさに対応した課題設定が求められる。本研究では障害児を対象とした従来の研究における方法に加え、ICT 機器を利用した課題の作成や子どもの負担が少ない課題遂行の方法を工夫するなど、聴覚障害児の特性を踏まえた客観的測定を行っている。以上のことから、本研究で用いられている方法は当該研究分野において妥当であると判断できる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、聴覚障害児に関する言語研究、文章産出に関する心理学的研究、文章構造等に係る言語学的研究などの国内外の学術論文を中心に、最新の研究動向が綿密に押さえられている。文章の評価項目の検討では全国の特別支援学校を対象とした調査を実施し、さらに聴覚障害児 291 名を対象とした文章の評価と実験的検討を行っており、研究資料の収集は質・量ともに十分であると判断される。データの収集にあたっては、特別支援学校との十分な連携を取り、研究参加者への倫理的配慮および研究倫理に関する所定の手続きに基づいて適切に行われている。データの分析に関しては、聴覚障害児の発達水準や障害に応じた特性の影響も十分吟味されており、

分析に使用した統計的手法やその解釈も妥当なものである。以上のことから、研究資料やデータの収集及び分析についても適切と判断できる。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

本研究では、書く目的に応じて文章を構成する言語要素の産出傾向が異なり、それに応じて評価における観点も変化するなど、課題環境の設定が文章産出プロセスと相互作用の関係にあること、それ故、聴覚障害児の書いた文章の評価においては目的や評価観点の明確な設定や説明が重要であることが考察された。この点は聴覚障害児の文章を客観的に評価する上で、Hayes らの文章産出モデルが有効な視座を与えることを示すとともに、聴覚障害児への言語指導・支援における重要な視点となる。一方で、従来より指摘されるように、認知的・言語的特性によって心的表象の文章化に困難を有する聴覚障害児が存在し、課題環境が円滑に文章産出過程の中に組み込まれない場合があることを示している。この点については、聴覚障害児特有の文章産出モデルを想定し、文章産出時の心的操作を検証する必要があるという新たな研究課題を提起して、論理的な仮説を提示しつつ考察している。以上のことから、本研究でなされている考察及び結論は妥当であり、十分な学術的水準に達していると評価できる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究では、心理学的なモデルに基づき聴覚障害児の文章産出の特徴を適切かつ客観的方法によって明らかにするとともに、課題環境が文章評価に及ぼす影響を実証的に検証し、評価における観点設定の重要性を指摘している。聴覚障害児を対象とした特別支援学校では、障害の重度化・多様化とともに言語指導に一層の難しさが生じていることが指摘されている。特に書くことの指導・支援に関する知見が不足しており、本研究の成果は、聴覚障害児への教育指導における有益な示唆を与えるとともに、障害児を対象とした言語発達研究や心理学的研究の発展に寄与するものとして学問的意義が高いと認められる。以上のことから、本研究は取得学位に相応しい意義や成果が十分に認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい研究であると判定した。